

---

# 愛、死、てる。

立木ノエミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛、死、てる。

### 【Zコード】

Z8096E

### 【作者名】

立木ノエミ

### 【あらすじ】

愛するが故に、自傷行為に走る夫…そんな夫に精神的に追い詰められた友人のためを思つて言つた一言から始まつた最悪のシナリオ…。

「マーク。お願い、出て」  
何十秒か呼び出し音が繰り返されると電話器から留守番電話サ  
ービスの無機質なアナウンスが流れてくる。  
留守番電話にメッセージを吹き込む。切る。また電話を掛ける。  
呼び出し音、そして再び流れる無機質な声……もう何度、メッセ  
ージを吹き込んだら。

そういうしてこの内にタクシーは由々真新しマンションの前に  
止まった。慌ててお金を払う。

「お釣りは結構です」

タクシーを飛び出した私はマンションの入り口でマークの部屋番  
号を押し、チャイムを鳴らした。

「マーク? 私、リカよ。いるなら開けて」  
オートロックが外された。

よかつた。マークは無事だ。

私は十一階のマークの部屋へと向かった。

「マーク?」

何度もドアを叩く。返事がない。ドアノブに手を掛けると何の抵  
抗もなくドアが開く。

「マーク。いるの?」

入り口で声を張り上げる。部屋の中は真っ暗だ。私は恐る恐る部  
屋へ足を踏み入れる。

「……マーク?」

廊下の先に位置するリビングでコラリと人影が揺れるのが見えた。  
私は手探りでリビングの電気のスイッチを入れた。

「ヒツ」

リビングが光に照らされた瞬間、私は両手でキックキック口元を

押された。

悲鳴や嗚咽や、吐き気、あるいは発狂……その他もろもろを押し  
え込もうとするようになってしまった。

一人掛けのソファの上には、変わり果てた友人の姿があった。  
そう、ちょうど一週間前、彼女の夫が死んでいたのと同じソファ  
の上に……。

「あつちゅあ～、もうこんな時間になつちやつたマイクを片手に時計を見ながらマークが言った。時間はすでに十一時を回っていた。私達は慌ててカラオケボックスを出た。

「ごめんね。新婚さんなのにつき合わせちやつて。旦那さま、怒つてない？」

マークはつい三ヶ月程前に結婚したばかりだった。玉の輿というほどでもないが新郎の父は一流企業の部長で、新郎も同じ会社で働いている。

嫁の立場というのはなかなか気苦労が多いのか、久しぶりに会つたマークのはしゃぎっぷりは尋常ではなかつた。暑氣払いということでビアホールでジョッキを重ね、行きつけのバーへ行き、まだ物足りないというのでカラオケへ行つたのだった。

「アハハハ、そうだね。引つたぐりにでも遭つて、警察に被害届け出しに言つてたとでも言つわ」

「何よ、その無理やりな言い訳」

アハハハとつられて私が笑つているとマークはガードレースに足を掛けた。

華奢なヒールのサンダルはバランスを崩し、「あっ」と声を上げる間もなくマークは道路へ激しく転倒した。

「ちょ、ちょっとマーク。何やつてんのよ！」

マークの膝は擦りむけ、受身を取るような姿勢で転んだため肘の辺りからは血が薄手のブラウス越しに滲んでいた。

「アハハハ、大丈夫。飲んでるからね。あんまり痛さは感じない」

そう笑いながらマークは、カバンを持ったまま引きずられたとしたらもうこの辺も汚れてるわよねと自ら洋服をアスファルトに擦りつけた。

私はマークのその行動に薄気味悪さすら感じながら言った。

「ねえ、マークお。旦那さんに怒られそうなら、私が無理やり引きとめたって説明するから。ね、何ならマークん家まで一緒に行ったげてもいいし」

「ダメダメ、そんな事したらリカの身が危なくなっちゃうから」「え」

マークの言葉に不穏な響きを感じ、聞き返そうとした時にはすでにマークはタクシーを捕まえていた。

「じゃあねえ」。絶対にまた遊びに行こうね~」

タクシーが動いてもマークは座席後ろのガラス越しにいつまでも手を振っていた。

訝然としない思いを抱きながら、私は小さくマークに手を振り返した。

マークと再び会ったのは飲みに行つてから、一ヶ月ほど経った日のことだった。

「お待たせ。もう注文した？　じゃあ、私も日替わりで」  
マークからお昼でも食べないかと連絡をもらつた時から嫌な予感がしていた。

仕事があるから平日の昼間はゆっくり出来ないし、大体お酒が好きなマークからランチのお誘いなんてあり得なかつた。

「ごめんね。忙しいのに」

「うん。でも今日フレックス使つたから。二時まで大丈夫よ」  
私はあえてカラリとした笑顔を作つた。しかし辛うじて笑みを返すマークの顔色は暗く冴えなかつた。

その弱々しい笑顔を見て私は思い切つて尋ねてみた。

「ねえ、旦那さんと上手く行つてるの？」

マークは顔を引き攣らせ、ビクリと身体を震わせた。  
やはり……私は单刀直入に聞いた。

「旦那さんに暴力でも奮われてるんじゃないの？」

「つうん、違う。それは違つ」

マークは顔を上げ即座に否定した。

暴力ではない。だつたら一体……しかしマークはそのまま俯いて口を噤んでしまつた。

「ねえ、直接的な暴力はないにしても、何らかの形で傷つけられてるんじゃないの」

「教えてよ。一体何があつたの」

「どうせ……信じてもらえないよ。親でさえ信じてくれないんだもん」

マークはやがていつつと溜息をついた。

「信じるか信じないか……話してもらわないと判断できないじゃない」

私もそう言つて溜息をついた。

しばらぐの間気まずい沈黙が流れ、マークはやっと重い口を開いた。

「この間、飲みに行つた時、遅くなつちやつたじゃない」

「あの後、怒られた?」

「ううん。怒られはしなかつた。それどころか私の怪我の心配をして手当してくれた。そしてお茶でも煎れるよつて言つてキッチンへ行つてお湯を沸かしてくれたの」

「よかつたじゃない」

そこまで言つとマークは一寸言葉を切り、沈痛な面持ちで視線をテーブルに落とし、そして再び口を開いた。

「じばりじへしてキッチンから騒がしい物音がしたの

「物音?」

「慌ててキッチンへ入つたら、床に彼とヤカンが転がつてて」

マークは顔を上げた。

「彼、熱湯を浴びたのよ」

「え……」

マークの言葉が意味するところが分からず私はポカーンとした。

「私が怪我したのと同じ右足と右腕に」

「ちょ、ちょっと待つて。一体どういう事?」

マークは苛立つたように眉間に皺を寄せて言つた。

『『ボクがついていながら君に怪我をさせてしまつたから、ボクは自分に罰を取れたんだ』』つていつのよつ。それだけじゃない。私が毎日家にいてもヒマだからパートにでも出よつかなつて相談すれば『いいんじゃない』つて言いながら熱した油に手を突つ込むし、実家に泊まりに行くつて言つたら割れたガラスの上を素足で歩くし……リストカットなんて日常茶飯事なのよ』

マークは一気に捲くし立てると「フウ」と大きな溜息をついて頭

を抱え込んだ。

マークの口から飛び出る信じがたい事実に私は言葉を失った。

「今朝だって、マークとお昼を食べに行くって言つたら、笑顔で『いつてらっしゃい』つていいながら、次の瞬間ガラステーブルに頭を打ちつけ……額がパクッて割れて、血がタラーつて……どう、笑えるでしょう」

マークは半ば自棄になつたように無理やり笑みを浮かべてそう言った。

「どうつて言われても……」

私は混乱した頭を抱えながらも、何か言葉を掛けなければ……そんな義務感にも似た思いで口を開いた。

「それおかしいよ。どう考へても彼は普通じゃない。離婚した方がいいよ」

「私だつてそうしたいわよ。でもそんな事口にしたら彼一体何いでかすか……」

「マークの親御さんに相談するとか」

「とつべの昔にしたわよ。でも信じてくれないのよ。そりやそろよ。彼、誰に対しても人当たりがいいんだもの。あんなにいい旦那さんなのにどうして離婚なんて考えるんだつて。ヤケドだって、ヤカンを持った手を滑らせてつて言えば誰でもその言葉を信用するわよ。自分で自分を笑いながら傷つける人間がいるなんて、誰も誰も信じないわよ」

マークは髪を搔き鳴る音に両手で頭を抱えながら首を激しく振つた。

「マーク、しっかりしてよ」

「もう、どうにかなりそ。毎日毎日、目の前で私のせいで人が傷つく様を目の当たりにしてるのよ。彼は自分自身を罰してるっていふけれど、そうじゃない。私を罰してるのよ。私を罪の意識で追い詰めようとしているのよ」

「マーク……」

マークの田尻に涙が滲んでいた。

私はマークの肩に手を乗せた。

ふと肩に乗せられた私の手につけられた時計をマークは見た。

「大変……早く帰らないと、今度は何をされるか

マークの顔に恐怖の色が広がった。

カバンを持ち立ち上がろうとするマークの両肩に私は手を置いて無理やり座らせた。

「リカ……」

「マーク、やつぱり旦那さんと別れなきゃ」

このまま帰してはいけない。このままではマークの精神が崩壊する。そう思った私はマークに向った。

「旦那さんに離婚したいってハツキリ言わなきゃ」

「でもそんな事言つたら、彼、自殺しかねない……」

「自殺なんてしない」

私はそう確信していた。

自分に罰を取れているのではなく、彼女に罪の意識を抱かせるためにやつてているのなら、彼女を繋ぎとめようとしてやつてしているのなら……彼は自殺なんてしないはずだ。

「直接言えないなら手紙にでも書いて……とにかく彼から離れなきゃ。マークがおかしくなっちゃつ」

マークは私の田を見つめた。まるで私の田の中に答えを探そうとしてもするかのようだった。

そうしてしばらく私の田の奥を探つていたが、やがてマークは弾かれたようにカバンと伝票を掴むと逃げるようにその場を立ち去つて行つた。

大急ぎで走つて行くマークの姿が曇りガラス越しに歪んで見えた。

マークから相談を受けたその日の夜遅く、突然電話が鳴った。

「リカつ。お願い来てつ。彼が、彼がああああ  
ブチッ……ツーツーツー。

私はパジャマの上から上着を羽織ると表へ出て急いでマークの家へ向かつた。

まさか……まさか……頭の中でも嫌でも想像してしまつ最悪の事態が浮かんだ。その度にそんなはずはないと打ち消す。  
そんなはずはない。そんなことがあってはならない。そんなことにはならないで……その思いはマークの家へ着く頃には切望に変っていた。

この春建てられたばかりの新築のマンション。染み一つない白いトランクスをぐぐり、エレベーターに乗り込む。

「マーク……ねえ、マーク」

インターホンを押すのも躊躇してドア越えてマークの名前を呼ぶ。

数回呼んで、やっとドアが開かれた。

「マークつ、よかつた無事なのね」

とりあえずマークの無事を確認できてホッとする。しかしマークはそれに対しても返事もせずに、フリコとリビングの方へ向かつ。

「マーク……」

マークの後をついてゆく。リビングの入り口で立ち止まるマーク。マークの肩越しに中の様子を見る。

身体中から、血の気が引いた。

リビングの中央にある一人掛けのソファの上には血まみれになつたマークの夫の姿があった。その胸元には包丁が突き刺さっている。

私は視線をマークに向けた。マークは身動きせずに変わり果てた夫の姿を凝視している。よく見ると返り血を浴びたのかマークの洋服にも血が飛び散っていた。

「まさか……」

そう呟いた途端、マークは私の方へ振り向いた。

「私じゃない、信じてリカ。私じゃない」

マークは私の両腕を掴んだ。その瞳は真っ直ぐに私を見つめていた。

「また彼が手首を切るつもりとしたの。もう私ウンザリして、それで言っちゃったの。もう限界だ、別れたいって。そうしたら彼、包丁を持ち出して、私に殺せつて言つたのよ。嫌だつて言つたら『殺さないなら、ボクが君を殺す』って言つて、私に無理やり包丁を握らせて……そうやって揉み合っている内に彼が、包丁の方に倒れこんできて……」

ワアアアアアと号泣するマークを私は抱きかかえた。

「分かつてゐる。マーク、分かつてゐる」

私の責任だ……私はマークの背中を擦りながら、苦い思いを噛みしめた。

## 証言

簡素な造りのテーブルとパイプ椅子だけの殺風景な部屋で私は一人、座つていた。

目の前に出されたお茶はもうすっかり温くなってしまっているだろつ……どちらにせよ、こんなところで出されたお茶など飲む気がしない。

別室ではマークが事情聴取を受けていたはずだった。それが終わってから私への尋問が始まる。

マーク、大丈夫だろうか……。

力チャヤ。

ドアが開く音に弾けるように私は顔を上げた。五十歳くらいの恰幅のいいスーツを着た刑事と思しき男と、私と変わらないくらいの制服を着た警官が続いて取調室に入つてくる。

「えつとあなたが、河野里香さん」

「あの、マーク、いえ竹内舞子の様子は」

年配の刑事は私を瞬間チラリと踏みするような視線で見定めると、すぐにとつてつけたような笑みを浮かべて言った。

「ええ、あんな目に会われた割りには落ち着いている方です。それよりあなたはどうして現場にいらされたんですか」

私はその年配の刑事に全ての事情を説明した。

マークが夜遅く帰つてくると夫が自分の身体に熱湯をかけたこと。友人とランチに出かけようとするとガラステーブルに頭を突っ込んで自ら怪我を負つたこと……。

彼女を束縛するために彼が当てつけのよつに自傷行為に走つていた事實を余すことなく語つた。

「ですからマークの夫が死んでしまったのは私の責任なんです。私が余計な事を言つてしまつたから……私が、私がマークの夫を殺したもののです」

私は涙ながらに訴えた。しかし年配の刑事は表情ひとつ変えず、むしろ面倒臭そうに言った。

「仮にあなたの一句で相手が死んだとしても、それはあなたのせいではありませんよ。被害者は舞子さんが持っていた包丁で死んだわけですから。問題は舞子さんに夫を殺す意思があつたかどうか……」

「だから言つてるじゃないですか。あれは事故です。そうでなければ正当防衛です。だつてマークの夫は自分を殺さなきゃマークを殺すつて言つたんですよ」

「それをあなたが実際に聞いたわけじゃないでしょ?」

私は開きかけた口を閉じた。

これ以上言つても無駄だ。疑うこと我が彼らの仕事なのだから。

「現場検証と検視結果が出てみないことには何も言えません。今日はもう帰つていただいて結構ですよ」

私は席を立つた。そして部屋を出る間際、立ち止まつて刑事の方を振り向いた。

「最後に一つだけ言つておきますが……被害者の身体から不審な怪我や痣が発見されたとしても、先ほど言いましたように被害者自身による自傷行為ですから」

「考慮します」

私の証言に果たしてどれだけの信憑性があつたのか分からぬが、とりあえず私は自分が言えることだけは言つておいた。

何とかマークに対する容疑が少しでも晴れてくれれば……そう思ひながら取調室のドアを閉めた。

その時だった。

「どうしてえ、どうしてなのよおおおお。なぜあの子があんな目に遭わなきやならないのよおおおおおおおお」

激しい慟哭が聞こえた。

廊下の向こう側から和服を着た女性が夫と思しき男性に抱えられるようにして歩いてくる。

「何で、何でなのあなたあ。あんなにいい子だったのに。どうして

こんな事にいいい

マークの夫の母親だらうか。仕立ての良い着物は着崩れ、結い上げられた髪からは何筋もの後れ毛が落ちている。

彼女は息子を失った悲しみから身も世もなく泣き叫びながら二つちへ向かつてきた。

すれ違いさまに彼女の夫が軽く会釈する。

まともに相手の顔を見ることが出来ずに俯いたまま私も頭を下げる。

母親がふと泣き止んだ。

視線を感じる。

私は足早にその場を立ち去った。

あの母親の慟哭が頭から離れなかつた。

事件から一週間後、マークの夫の葬儀が行われた。激しい罪の意識に苛まれた私はせめてお焼香だけでもと、会社を抜け出して葬儀に足を運んだ。

それに……マークの事も心配だつた。

事件以後、マークと連絡が取れなくなつていた。

事件後すぐマークは携帯を解約されていた。マンションへも行ってみたが現場検証中で立ち入り出来る状態ではなかつた。彼女の実家へも電話を掛けたが戻つてはおらず、逆にマークの居場所を尋ねられたほどだつた。

葬儀にいけばマークに会えるだらう……私の事を恨んでいるのかも知れないが、とにかく一度会つて話がしたかつた。

受付で名前を記入し、香典を手渡した。

何十人もの参列者の群れに改めて自分の罪を思い知らされる。

私は頃垂れながら焼香の列へ並んだ。

身内の人々が沈痛な表情で一人一人に頭を下げながら、参列者のお悔やみ言葉に耳を傾けている。

あの母親はその中心で固く固く手を握り締め、一点を見つめていた。

口を一文字に結んで、瞬き一つせずに佇んでいる。

その姿は痛々しく、慰めの言葉を掛けるのも躊躇われるほどだつた。

身内の人々の中にマークの姿はなかつた。私はお悔やみの言葉を

述べた後、マークの事を尋ねた。

「あの、舞子さんは……私、彼女の友人の河野と申します。彼女は葬儀には……」

そう言いかけたところで親戚の一人が「ちょっとひらりへ」と言いながら私の腕を取つた。

「あの、お焼香だけでも」

私は他の身内の顔色を伺いながらそう言つた。皆、眉間に皺を寄せながら私から目を逸らした。

その中でただ一人、母親が私の方を向いた。

先ほどまで魂を奪われたかのように一点を見つめ続けていた母親。その彼女の瞳は大きく見開かれ、私を凝視した。

「あのバカ嫁の友達だとおおおお」

母親はそう低く唸つたかと思うと突然私に掴みかかってきた。反射的に後ずさる。

周囲の人気が抑えるように背後から彼女を抱え込む。

「スミマセン。マークの事をそんな風に言わないでください。私が悪いんです。私が余計な事を言つたから」

私は必死になつて謝罪の言葉を述べた。

母親は嗚咽とも悲鳴ともつかない声で「離せ、離せ」と抵抗している。

私の腕を掴んでいた親戚の男は半ば強引に私を母親から引き離した。

「許さない。あのバカ嫁。許すもんかああああああ

愛する息子を亡くした、母親の雄叫びは斎場の外まで響いていた。

## 不安

追い払われるようにして斎場を出た私は、その場で静かに手を合わせた。

そしてその場を立ち去ると顔を上げると、そこにはマークの姿があつた。

「マーク、大丈夫」

「うん。元々お義母さん、私の事好きじゃなかっただし。もし私があの場にいたらそれこそ收拾つかなくなっちゃうから」

少し離れたところにある喫茶店でアイスコーヒーを飲みながら、マークは落ち着いた口調でそう言つた。

思つたより元気そうだ。私は少し安心した。

「ごめんね、マーク。私のせいです」

謝る私にマークはとんでもないと言つた風に手を振つた。

「リカのせいじゃないよ。遅かれ早かれ、ああなる運命だったのよ。不幸な出来事だつたけど、結果として私は解放されたんだもん」

マークはどこか吹つ切れたようで、その表情には解放された喜びすら感じられた。

夫の葬儀の日に不謹慎なのかも知れないが、それほどにまでマークは追い詰められていたということなのだ。

マークが私を恨んでいるから連絡がないのかと思った……それを聞くとマークは笑つた。

「だって携帯はつながらないし、連絡もないし……」

「ああ、それね……」

マークの表情が僅かに翳つた。

私は見逃さなかつた。じまかすよつて笑みを浮かべるマーク、元で「何?」と詰問した。

「ちょっとね、嫌がらせつてこうか」

「嫌がらせつて……お義理さん?」

「まあ、仕方ないんだけどね。それでちょっと姿をくらましてたの。どちらにしてもマンションは現場検証で戻れなかつたし」

「私にくらい教えてくれたつて」

「だつて、万が一リカに被害が及ぶような事があつたらさ……」

そう呟くとマークは表情を更に曇らせた。私はマークの腕を掴み擦りながら言った。

「大丈夫だつて」

「うん」

浮かない顔色ではあつたが、それでもマークは笑顔を見せた。

「まあ携帯も変えたし、新しい引越し先も決まつたから、さすがにそこまではお義理さんも追つてはこないか」

「新しい住所決ましたの」

「うん。今夜早速荷造りして、明日の朝一番に引越し屋さんに来てもらひ予定なの」

あ、そろそろ行かなきや。マークが時計を見て言った。

「『めんね、バタバタしてて。引越して落ち着いたら必ず連絡する。後、これ。色々心配かけたから』

マークはカバンから封筒を取り出して私の前に置いた。

「何よ、これ。いいよお礼なんて」

「いいから、気持ちだけだから。じゃあ私、行くね」

そう言つて立ち上がつたマークは新しい生活に対する希望に満ち溢れていた。

「必ず連絡ちようだいよ

レジに向かうマークの後ろ姿に向かつて叫んだ。マークは晴れやかな笑顔で手を振つた。

弾むようなマークの後姿を見送つた私はテーブルに残された封筒を手に取つた。

私は目を見開いた。

中には札束が入っていた。ざっと見て百万円は入っていそうだつ  
た。

「一体どうじつもありであんな大金……」  
会社へ戻ったものの、仕事をしている間中あるお金のことが気に  
なって仕方がなかつた。

仕事が終わり次第マークへ連絡を取ろうと思ひに、やつと電話が出来たのは夜の八時をすぎた頃だつた。帰る道すがら何度か電話を掛けみてた。

しかしマークは電話に出ない。

「引越しの準備に夢中で気がつかないかな」

そう思いながら携帯を片手に自分の部屋がある階でエレベーターを降りた。

マークの番号を発信し、電話を耳にあてたまま廊下を歩く。

「やつぱり出ないか

電話を切つて、顔を上げた。

「ヒツ……

携帯が手から滑り落ちた。

ドアに赤い塗料で殴り書きがされていた。

「ハ、ト、ゴ、ロ、シ……」

人殺し……。

私はその文字から目を離せないままに、電話を拾おうと膝を曲げた。

「ヒツ」

電話を探つていた手に何やらヌルっとしたものが触れた。

「何……これ」

落ちた携帯電話の脇に何やら赤い色をした塊が落ちていた。何だろ？と身体を屈ませてその塊に顔を近づける。

「…………ッ、…………キヤア、嫌だあつ」

屈ませていた上体が恐怖で後ろに仰け反った反動で尻餅をつく。何とか離れようともがくものの、腰が抜けて後ずさることも出来ない。

その赤い塊は……舌だった。

それも人間の……。

でも、一体誰の……。

「ハツ」

嫌な予感がした。私は恐る恐る携帯電話に手を伸ばした。マークへ電話を掛ける。つながらない。

今度はマンションの方へ掛けてみた。数回コールした後、電話は留守番電話に切り替わった。

「マークつ。マークいるのつ。お願ひ、返事してつ」

何度も呼びかけるが、録音時間が終了して電話が切れる。

私は駆け出した。

まさかあの舌は……。

恐ろしい想像を払いのけるように私はマークの住んでいるマンションのインター ホンを鳴らした。

「マーク? 私、リカよ。いるなら開けて」  
オートロックが外された。私は十一階のマークの部屋へと向かつた。

「マーク?」

何度かドアを叩く。

返事がない。

ドアノブに手を掛けると何の抵抗もなくドアが開いた。

「マーク? いるの?」

入り口で声を張り上げる。

部屋の中は真っ暗だった。

私は恐る恐る部屋へ足を踏み入れた。

「……マーク?」

廊下の先に位置するリビングでコラリと人影が揺れるのが見えた。  
私は手探りでリビングの電気のスイッチを入れた。

「ヒツ」

リビングが光に照らされた瞬間、私は両手でキツくキツく口元を押さえた。

二人掛けのソファの上に、首を仰け反らせ大きく口を開けた見知らぬ女の死体があつた。

いや、あれはマークだ。

その口は左右に大きく切り裂かれ、瞳は恐怖に大きく見開かれて

いる。

そしてその口の中にあるはずのものはない。

「ウウウフフ」

キツく押さえていた手の間から嘔吐物が漏れ出た。

その時、田の端でコラリと人影が揺れるのを捕らえた。

「あらあ、吐きやうなの」

コラリと揺れるようにマークの死んだ夫の母親が立っていた。着崩れた喪服とすっかりほどけた髪が激しく揉み合った後であることを物語っている。

手には剪定ばさみを持っている。

刃の部分が赤く染まっていた。

まさか、あのはさみで……。

「ウグッ」

そう思つた途端、再び吐き気が襲つてきた。

「あらあら、いけませんよ。せつかくあの子が買つたマンションを汚すなんてこと許しませんよ」

返り血を浴びた顔に神経質そうな笑みが浮かぶ。

「吐くならソロに吐きなさい」

コラリと母親は私に近づきながら、田線をマークの方へと向けた。私は激しく首を振つた。次の瞬間、頭に熱いような痛みを感じた。

「吐けつて言つてるだろつ。あのバカ嫁の口ん中に吐こまえつ。  
吐かないとアンタの舌も切つてしまつよ」

母親は思いつきり私の髪の毛を引っ張りながら、目の前で剪定ばさみをちらつかせた。

吐き氣と恐怖で涙が流れた。

「ほら、こうなりたいのかい」

母親が私の頭をマー口の前に突き出した。

鋭利な刃物で切られた舌の根元からは血がジクジクと噴出している。

あまりのおぞましさに胃がヒクつく。

胃の中のものを恐怖と一緒に吐き出してしまいたい……。

でも嫌だ。マー口の中になんて。

友達を、死者を冒涜するような真似は絶対に、絶対に嫌だつ。

「往生際の悪い娘だねつ。そんなに舌を引っこ抜かれたいかいつ」

母親が剪定ばさみを振り上げた。

もうダメだつ……私はキツく目を閉じた。

「待てっ」

野太い男の声に母親は扉の方を向いた。

その瞬間、髪の毛を掴む手から力が抜けた。

私は彼女の手から逃れ、絨毯の上に思いつきり嘔吐した。

数人の警官に母親が取り押さえられるのが横目にボンヤリと見える。

「無事か」

田の前にハンカチを差し出される。

顔を上げるとそこには取り調べをしたあの刑事の姿があった。

「怪我はないようだな」

取調べ室で刑事はいつになく労わるような調子でそう言つた。  
目の前にはお茶が出されている。以前と変らず不味そうだったが

私はゴクゴクと飲んだ。

胃液で喉が荒れていた。

「どうして、マークのマンションへ来たんですか」  
刑事は一枚の紙を私の前に差し出した。

「逮捕状……」

それはマークに対する殺人容疑の逮捕状だった。

どうして……と聞くまでもなく刑事は説明を始めた。

「彼女の夫には多額の保険金が掛けられていた」

私は顔を上げた。刑事は私に同情するような目で見つめながら続けた。

「彼女の夫の遺体に傷跡などなかつた。ヤケドの痕も……きれいな  
もんだった」

「暴力を受けっていたのは、マークの方だつたんですね」

刑事は軽く目を見開いて私を見た。私は机の上を見つめながら言つた。

「葬儀があつた日、マークからお金を受け取つたんです。百万円あ  
りました。お礼にしては幾らなんでも大金すぎる。それで今までの  
マークの言動を思い起こしてみたんです。

初めて相談を受けた日、確かマーク『遅くなつたら向されるか』  
って口走つたんです。夫が自傷行為に走ることを心配するなら『何  
してかすか』ですよね……それにマーク、夏だといつのこ長袖のブ  
ラウスを着ていました

私は口早に一気に話すと、何とか自分を落ち着かせようと溜息をついた。

「結局、私は利用されてたんですね」

そう口にすると涙で声が震えた。

ついにやつを自分を襲った恐怖やら悲しみやらで心が散り散りだつた。

ただ、マークに対する怒りは不思議と感じてはいなかつた。

「近所で聞き込みを行つたところ、姑が毎日のようにマンション出入りしていたらしい。」

暴力を奮う夫とヒステリックな姑。

しかし夫の父と彼女の父が仕事上のつき合にもあって、実家へ逃げることも出来なかつた。

……竹内舞子は相当地に追い詰められていたんだ」

刑事の言葉を聞いている間中、私は目と唇を固く固く閉じ、歯を食いしばつた。

そうでもしなければ溢れ出る感情を抑え切れなかつた。

やうしてみるとマークの顔が浮かんだ。

それはあの舌を抜かれた断末魔の叫びが聞こえてくるような死に顔ではなくて、

新たな生活に希望を抱いて喫茶店を去つた、あの笑顔だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8096e/>

---

愛、死、てる。

2010年10月8日15時50分発行